



日本は世界でも「めがね」の愛用率においてはトップクラスではないでしょうか。かつては、めがねは日本人の代名詞として用いられた時もありましたが、今では本来の目的はもちろん、特に御婦人方にとってはお洒落の重要なアイテムのひとつにもなっています。日頃お世話になっている「めがね」に感謝の気持ちをささげよう、ということで、明治百年を記念した昭和43年（1968）に東京眼鏡販売店協同組合の人々によって、不忍池弁天堂への参道の一画に「めがね之碑」が建てられました。ここで疑問が生じます。なぜ上野公園内なのか・・・？と。答えは、こうです。不忍池弁天堂が造られたのは江戸時代初期の寛永年間でした。寛永寺を創建した天台宗の天海大僧正によるものです。天海は死後、朝廷から「慈眼大師」という諡号を賜りました。「眼を慈しむ」という文字が諡号に用いられていることからこれにあやかったということです。



天海僧正は「見立て」という、さまざまなお堂を京都周辺にある神社仏閣に見立てる思想によって上野の山を設計しました。琵琶湖にある竹生島の「宝厳寺（ほうごんじ）」に見立て、天然の池であった不忍池に中之島を築き建立されたのが「不忍池辯天堂」です。当初、お堂に参詣するためには船を使用していましたが、参詣者が増えたことから橋がかけられました。不忍池のどこからでも参拝できるように、八角形の建物になったと言われ、7月から8月にかけては、不忍池の蓮が咲き、極楽浄土を連想させる光景が広がります。

ご本尊である辯才天は、音楽と芸能の守り神として広く信仰され、「辯”財”天」とも書くことから、金運上昇といったご利益もあると言われています。辯才天は琵琶を持った姿で知られていますが、不忍池辯天堂の辯才天は、8本の腕に煩惱を破壊する武器をお持ちになっている「八臂辯才天（はっぴべんざいてん）」。9月に行われる「巳成金（みなるかね）大祭」で目にすることができます。

不忍池辯天堂には、豊臣秀吉公が大切にしていたという伝説のある、谷中七福神とは別の「大黒天」も祀られています。



上野駅の西側に位置する上野公園の不忍池しのばずのいけ東岸。上野の山から弁天島に渡る橋の少し南側に茶色の石碑が建つ。

大正6年(1917)に、3日間かけて京都と東京の間（508km 23区間）で駅伝が行われた。これが駅伝のはじめとされる。これを契機として、3年後の大正9年に箱根駅伝が誕生した。

なお、全く同じ形の碑が、駅伝の出発地である京都にも建てられている。